I am Jazz!（ジャズ・スーパー列伝）

ジャズの発展に貢献し、その歴史に名を刻んだ名プレイヤーたち。その人生は、楽器が異なる如く千差万別。このコーナーでは、そんな個性的なジャズマンたちの功績を称え、生き様を紹介することで、より多くの人々にジャズの素晴らしさを伝えていきたい。

Vol.9

Lee Morgan【リー・モーガン】

～“神童”と呼ばれた天才トランペッター～

提供：東芝 EMI

Profile

1938 年 7 月 10 日米国ペンシルベニア州フィラデルフィアに 4 人兄弟の末っ子として生まれる。本名は Edward Lee Morgan。父親はトロンボーンとトランペット、姉はピアノを弾き、ジャズ・ファンだった兄の影響もあり、幼い頃からジャズのライヴを見に行くなど、13 歳の頃にミュージシャンになることを決意。14 歳の誕生日に両親からトランペットをプレゼントされ、ディジー・ガレスピーや近所に住んでいたクリフォード・ブラウンの影響を受けながら、ほぼ独学で楽器をマスターする。高校時代には同級生ボビー・ティモンズ（後に共にジャズ・メッセンジャーズに参加）等とバンドを結成。56 年にディジー・ガレスピーのバンドに参加し、同年 11 月若干 18 歳でブルーノートから『Lee Morgan Indeed!』でデビュー。“クリフォード・ブラウンの再来”と称される。翌月 12 月に『Lee Morgan Vol.2』を録音、更にその 3 ヶ月後には『Lee Morgan Vol.3』を録音する。58 年 9 月にアート・ブレイキー＆ジャズ・メッセンジャーズ（JM）に加入。同バンド在籍中にアルバム『モーニン』が世界的大ヒットを記録し、61 年 1 月に同バンドで初来日を果たす。61 年夏に脱退後、63 年にリリースしたアルバム『ザ・サイドワインダー』が大ヒットを記録し、ビルボードのヒット・チャートを賑わし、“ジャズ・ロック”ブームを巻き起こす。64 年に JM に再加入し、65 年 4 月に脱退後はソロで活動し、ブルーノートで多くの録音を行う。70 年には、ローランド・カーク等と共に黒人音楽家の地位向上と放送メディアへの出演を増やすという運動を展開した団体「ジャズ・アンド・ピープルズ・ムーブメント」を結成。晩年は西海岸でも活動を行う。1972 年 2 月 18 日、NY のジャズ・クラブ「スラッグス」で射殺される。享年 33 歳。

LM's Great Album

他にも、クリフォード・ブラウンに捧げた「I REMEMBER CLIFFORD」収録の『リー・モーガン Vol.3 』。唯一のワンホーン作『キャンディ』。名演「月の砂漠」収録の『ザ・ランプローラー』など名盤多数です！

弱冠 18 歳！　天才リー・モーガンのデビュー作品！！

Lee Morgan Indeed!
Lee Morgan
(東芝 EMI：TOCJ-6453)

Lee Morgan (tp), Clarence Sharp (as), Horace Silver (p), Wilbur Ware (b), "Philly" Joe Jones (ds)

1. Roccus 2. Reggie Of Chester 3. The Lady 4. Little T
5. Gaza Strip 6. Stand By

自身の最初のアイドルであり、このアルバム・デビュー前からバンドでお世話になっていたディジー・ガレスピーのトレード・マークである 45 度上向きのトランペットを吹くジャケットの表情も印象的で、タイトルのロゴにも勢いを感じさせる。録音は 1956 年 11 月で、僅か 4 月前に 18 歳になったばかりのリー・モーガンが、ホレス・シルヴァー（p）、ウィルバー・ウェア（b）、フィリー・ジョー・ジョーンズ（ds）等、バリバリに活躍する先輩ジャズマン達を前に威風堂々と“神童”たる由縁、天才振りを発揮している。正に、この録音の 5 ヶ月ほど前に自動車事故で命を落としたクリフォード・ブラウンの再来と言わしめる入魂のデビュー作だ！

このファッション性と不良性に完全ノックアウト間違いなし！

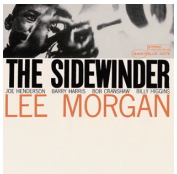
Here's Lee Morgan
Lee Morgan
(Vee-Jay/P-Vine Records：BSCP-30050)

Lee Morgan (tp, fh), Clifford Jordan (ts), Wynton Kelly (p), Paul Chambers (b), Art Blakey (ds)

1. Terrible "T" 2. Mogie 3. I'm A Fool To Want You
4. Running Brook 5. Off Spring 6. Bess 7. Terrible "T" (take 6)
8. Mogie (take 2) 9. I'm A Fool To Want You (take 1)
10. Running Brook (take 4) 11. Bess (take 3)

細身のスーツをビシッと決めて、トランペットとタバコを片手にポーズを決めるリー・モーガン。まるでシックなファッション雑誌の表紙のようなジャケットだけでも手に入れたいアルバムだが、サウンドもこれまたカッコいい！1960 年 Vee-Jay レーベルからリリースされたリーのジャズ・メッセンジャーズ在籍時の録音で、同バンドのリーダー＆御大 A・ブレイキーがドラム。C・ジョーダン（ts）に W・ケリー（p）、P・チェンバース（b）という強力なメンバーを従え、リーのスリリングでクールなプレイが胸を打つハード・バップの傑作。「Terrible "T"」「Mogie」「Running Brook」のカッコよさ、「I'm A Fool To Want You」の哀愁を聴いて欲しい。

ビルボードのアルバム・チャートで最高 25 位を記録した名盤



The Sidewinder
Lee Morgan
(東芝 EMI：TOCJ-6408)

Lee Morgan (tp), Joe Henderson (ts), Barry Harris (p), Bob Cranshaw (b), Billy Higgins (ds)

1. The Sidewinder 2. Totem Pole 3. Gary's Notebook
4. Boy, What A Night 5. Hocus-Pocus

ジャズ・メッセンジャーズ脱退後の1963 年に録音され、ビルボードのチャートを賑わし、“ジャズ・ロック”ブームを巻き起こした超名作！　ジャズ・ファンならずとも、タイトル曲「The Sidewinder」は、一度は耳にしたことがあるのでは…。一部でこのアルバムの大ヒットにより、リー自身のキャリアの幅を狭めてしまったのではないかという悲観的な意見も聞かれるが、ジャズのパワーやロック / ポップスというジャンルと対抗し得る可能性を知らしめた作品としては貴重な記録だ。本作でリーと初共演となったジョー・ヘンダーソン（ts）と、長らくリーのお気に入りだったバリー・ハリス（p）のいぶし銀の存在感にも要注目！

リー・モーガンの最期

1972 年 2 月 18 日、NY にあったジャズ・クラブ「スラッグス」でライブ演奏をしていたリー。その 2nd ステージと 3rd ステージの間の休憩時間に、ヘレン・ムーアという女性（愛人と奥さんという 2 説がある）に拳銃で撃たれ、救急車で病院に移送されたが、出血多量でほとんど即死状態だったそうだ。当夜リーと共演していたのであろうドラマーのビリー・ハートの証言によると、リーが大量のコカインを買った後に売人と口論になり、電話でヘレンに銃を持ってくるように頼み、ヘレンがクラブに現れるとリーが別の女（リーがヘレンとの別れを真剣に考えていたほどの相手らしい）といるところを目撃。口論となり、リーがヘレンをクラブから追い出したが、忘れ物を取りに戻って来たヘレンと今度はつかみ合いとなり、遂にヘレンが引き金を引いてしまったということだ。また、リーが最後に彼女に発した言葉は "Get away from me, you dirty bitch." だったそうだ…。まるで映画のワンシーンであるかのような壮絶な最期を遂げたリー。余談だが、ジャズ・メッセンジャーズの名盤『チュニジアの夜』収録の「ヤマ」という曲は、1961 年の初来日当時、「山本」という姓のリーの奥さんだったという女性に由来するタイトルだ。

映像で拝むリー・モーガン

リーのプレイを映像で見るなら、『Tokyo 1961 + London 1965』（Euro 輸入盤 DVD）がお薦め！　前半は 1961 年 1 月 11 日、初来日時に TBS スタジオで収録されたもので、若きリーとウェイン・ショーターのフロント・ラインにボビー・ティモンズのピアノも渋く、「Dat Dare」がカッコいい！　後半は 1965 年にロンドンのスタジオで収録された映像。

His Life, Music And Culture

1990 年にウィントン・マルサリスに見出されデビューしたロイ・ハーグローヴというトランペッターがいるが、90 年代初頭に NY で彼のステージをよく見たが、そのカリスマ性と不良性にリー・モーガンのイメージをダブらせた思い出がある。マイルス・デイビスやチェット・ベイカーと同様に、ジャズ・トランペッターにはどこか不良のイメージや、ケニー・ドーハムなどに代表される哀愁漂うイメージがある。常にファッションに気を使い、クールでスタイリッシュだったリー・モーガン。そんな彼の「人生・音楽・精神」を垣間見るには、洋書だが Tom Perchard 著の『Lee Morgan: His Life, Music And Culture』（ハードカバー：297p）がお薦め。アマゾン等で購入可能。